

初 重 往 生 記

前 田 聽 瑞

一 大意 五重相傳の劈頭に來るものに初重往生記なる御卷物がある。初重とは最初の心得といふ程の意味で、即ち入信の第一步、修道の門出とも申すべきものである。その初重『往生記』は元祖法然上人の御作、相傳の上ではこの御卷物を「機」と習ひ傳へて、まづ自分といふもの、自分の力を正しく見つめること、脚下を照顧することが佛法に入るの門戸、淨土の法門を戴くための一大肝要事であることを御示し下されたものである。

二 生活輪 禪門の大徳道元禪師は「佛法を習ふは自己を習ふなり」と云はれたのは洵に適切なる道破である。しかし、自己を習ふことと、自己を正しく視つめることは決して容易なことではない。

そこで、人間生活とはどんなものであるか——これもなか／＼難解な問題であるが、このことを簡單に申上げるために、姑らく吾々人間は三重の生活輪によつて組立てられてゐるものと見て、三輪に別けて(1)外輪として、本能輪(自然輪)(2)中輪として、理性輪(文化輪)(3)内輪として、信仰輪(宗教輪)、

斯ういふ事に就て述べて見よう。

先づ(1)外輪本能輪の方から考へて見るに、凡そ世の中のものは何物でも此の世の中に生れて來たものである限りは、生きよう生きようといふ要求が總べての根本になつてゐる。生命そのものは生きよう、生きようとする。飽くまでも生を遂げようとする、そうしてそれに危害を加へるものには命懸けで抵抗しようとし、そうして益々伸びて行かうとする。この生きよう、伸びよう、力強く生きよう、力強く伸びよう、この事は何といつても生きとし生けるものの根本的な欲求である。持つて生れた自然の氣持即ち本能である。本能として先づ第一に來るものは飢渴を充足する本能であらう。子供は生れ落ちると、何よりも先づ第一に母の乳を吸ふことを知る。これは自ら持つて生れた實に巧妙な働きである。食べよう、食へる食へない、此問題を中心として世間は騒いでゐるのである。又嫉妬と云へば誰でも大人の世界に限られてゐるものゝやうに考へるが、あのあざけない子供の世界にもおびたしい、ねたみの感情がはびこつてゐることを見逃すことは出來ない。生れて八十日、子供はもう嫉妬を覺えてゐる。この嫉みは何といつても利己心、自己中心主義がその原因をなしてゐる。要するに生きよう、自分を生かさう、自分を伸ばさう、斯ういふやうなことが、すべて此の世の中の問題の核心を成してゐるのであつて、子供の世界も大人の世界も乃至複雑な人間の社會も問題の中心は實にこゝに存する。大聖釋尊はこの生きんとする欲望を三通りに分けて私どもの身の持ち方に就て訓諭さるゝところがあつた。第一は愛欲、第二は

有欲、第三は繁榮欲である。第一の愛欲とは廣く云へば一般に肉體的快樂に對する欲求ではあるけれども、狭く云へば専ら異性に對する欲求を意味するもので、要するに生命そのものが子孫に於てその持續と擴大とを實現せんとするの本能である。それは痛ましくも、あさましくとも、誰しもこの本能生活を逃避し得ないのである。第二の有欲とは存在欲とでも云ひますか、正しくシヨペンハウエルの所謂「生きんとする意志」に相當し、専ら個體を持續せんとする欲求である。人生は決して長くはない。百歳の壽命は人の最大限度である。しかも現世に對する愛着心は上下の隔てなく一般に強いと云つてよい。殊に現世に於ける成功者はその執着心が特に強烈なる譯で、かの秦の始皇帝の如きは常に方士に心酔し、大に之を寵遇して不老不死の仙藥を求めしめた程である。方士徐福なるものを東方蓬萊島に派して神藥を求めしめたといふ傳説は誰もが承知してゐるところであらう。人は死んでゆかねばならぬ。しかし死にたくないといふ存在欲が即ち有欲である。第三の繁榮欲とは權力又は財力に對する欲求で、即ち自己の位置又は財産を背景としてこの世をばわがもの顔に羽振を利かせんとするの欲求と見るべきものである。

右の三欲はいづれも生命そのものに固着する欲求の表はれであつて、苟くもこの世に生を享けたるものである限りは、徹尾徹頭生き抜くことを念願してゐるのである。

凡そ生き物である以上、その本能のまゝに生きることが自然の道であり、法爾の理でもある。よき地

位にありつきたい、金を儲けたいといふことは、恐らく人間である限りは、誰もが要望するところである。従つて、假りに金を儲けるといふ一つの事實についても、本能輪の境地に於ては少しでも多くを儲けたいといふ盲目的な貪欲が全體を支配する。

しかし、この生き方、この進み方は頗る危険である。この危い本能輪の生活を内部から調御するのが(2)理性輪である。どんなに儲けたくとも無法な儲け方はよろしくない。正しく、明るく金を儲けねばならぬ、といふことに氣づくのである。本能輪と理性輪との關係は恰かも船の櫂と舵とのやうなもので、櫂の運用は能く船を進めはするが、舵で甘くこれを調節せねば、その進行は結局盲進となる。一定の目的地に達し得ない計りでなく、終にその船を危険區域に引き入れてしまふ。本能輪の生活に於てはその生きんとする意志が激甚であるところから、やゝもすれば盲進に陥り易い。これを適當に調御し邪路に踏み込まないやうにするためには、どうして冷靜なる理性輪の助けを俟つ必要がある。

更にそれが一段深く、高く(3)信仰輪の境地にまで進むと、儲けた金を有難いめぐみであると押し戴けるやうになる。この境地にまで躍進した生活が即ち宗教的生活である。一見平凡のやうであるが、この知恩・報恩の生活にまで導き入れることが、佛教のねらひどころである。忠と云ひ孝と云ふも唯有難い勿體ないと感謝し感激するの外にはないのである。「箸とらば天地御代の御惠、主人と親の恩を忘るな。」天恩を感じ、父母の恩を感じて勿體ないと敢然捨身報恩の大道に振ひ立つところに佛道があり、眞の人

間道が顯現される。知恩即ち道場、報恩即ち眞の人間道である。こゝが念佛の天地であり、信仰輪の境地である。

三 初重の精神、機の一宇　そこで問題は、果して然らば念佛の天地に躍進し、信仰輪の境地に悠遊するためには何處にその入信の秘鍵を求めればよいかといふに、之に就て第七代了譽聖上人の先づ指示されたのは、『往生記』の精神に生きよといふことであつた。即ち『往生記』の精神を機の一宇に習ひ極めて、ありのまゝに自分といふものを諦認するが、入信の第一歩であるといふのである。『往生記』を初重として最初に傳へらるゝ所以も亦こゝにある。

四 機とは何か　かく初重往生記の精神は機の一宇に盡きるとして、然らばその機とは何かといふことは一應説明する必要がある。

機といふ言葉には色々の意味があり、色々の使ひ分けがあるが、佛教で機といふ場合はいつでも機類・機根などいふ熟語として表はされ、教化の當體即ち私ども人間自身を指すものと見てよい。佛教ではすべての人間はその本性として全的に或は部分的に佛教の理想を實現し得べき可能性を有するものとするが故に、皆當に佛道に歸入すべきものとする。この意味に於て、未だ佛道に歸入ざるもの、今日入らん

とするもの、正しく入れるもの、及び既に入り了れるものを汎べて機といふのである。

即ち善知識の指導により或は自學自修することによつて善導され啓發さるべき性能を有するものゝ義である。それで、この機といふ言葉は一般には寧ろ「うつは」の器といふ字で解釋した方が早解りするかも知れぬ。器は器分・器量などゝ熟字して「生れつき」「もちまへ」といつたやうな意味がある。『無量壽經』(卷下)にもこの「器」の字を用ひて機(機類)を表はした箇所がある。即ち「器に隨つて開導して經法を授與するに承用せずといふこと莫し。」とある。この器この「生れつき」「もちまへ」が即ち佛教でいふ機であり、機根である。

五 往生記とその梗概

ところが自分のもちまへ、自分の機を知るといふことは決して容易ではない。人を審くものは多いが自分の非を見るものは少い。心眼を開いて自己の姿を正視し、自己の微小に氣附いて佛の前にひれ伏す心持になりきることは實に至難のことである。いはゆる疾前無藥・機前無行で、無病息災のものには藥の用がないと同じく、知機以前即ち自分の姿、自分の如是相に氣附かない間は佛に縋る氣持は出て來ない。そこで、まづその機を知らしめるために『往生記』といふ御書物をお傳へ下されたのである。

さて、この『往生記』には少しも理窟ばつたことは書いてない。たゞ往生するための條件並に往生人

の種類が指示されてあるだけである。

そこで、その往生といふ言葉の意味であるが、この言葉は一般には随分曲解されてゐる。日本人はよく駄洒落を言ふ。極く神聖な世界のことでもよく駄洒落式に使はれることがある。

往生といふ言葉もその一つで、「どうも今日は困り果てた」とか、或は死んだと云ふ時に「往生した」といふことを言つてゐる。是は言葉の墮落である。往生といふ言葉の原の意味はさういふことではない譯である。徳本上人の『勸誠聞書』なるものゝ中にある言葉

必ず〜死ぬるのぢやないぞよ、佛法は死ぬる法は教へはせぬ。死なぬ法を教へるのぢや。往生といふ字は、死ぬるといふ字にかきはせぬ。往き生るゝと書くぞよ。この通りに心得て精出して御念佛を申さつしやるがよい。さつばりと死ぬるのぢやないぞよ、極樂へ生れるのぢや。

實際この通りで、往生とは往き生るゝ、佛の莊嚴淨土の世界に往きて生るゝの意である。それは阿彌陀佛の御名を稱へることに依つて往きて生るゝといふことであつて、非常に理趣深き含蓄のある言葉なのである。その往きて生るゝといふことは何も死んでから後、初めて往きて生るゝといふのではなくして、「此、世及後、生、」生死を一貫して死んでから後のことも勿論であるけれども、此の世にあつて此の儘に淨土に往きて生るゝ、所謂「頭を低れて佛を禮するは此の國に在り、頭を擧ぐれば己に彌陀界に入れり」と善導大師が『般舟讚』の中に歌はれてあるやうに、此の世、此の世の生活の中に立

つて、さうして其處に往生といふことが味はれて来る。往生とはたい希望に生き抜いて行く、永遠に生き往くといふ思想で、洵に高明な、しかも意味の深い言葉である。

生くるとも死すとも知らず我れは唯

春の光に流れてぞ行く

これは松浦一氏の歌である。これは生死に捉はれず、いはゆる「生くるとも死すとも知らず」で、唯廣大無邊な春の光に身を任せて流れ行くまゝに流れる。この春の光は如來の慈光、その慈光を仰いで、光のまゝに流れて行くといふのである。かういつたやうな謙虚な氣もちで如來様が拜め、御念佛が申せて、往生することが出来るやうになる條件並に往生人の種類を御示し下されたのが『往生記』である。

先づ初めに「難遂往生の機」と言つて、往生の遂げにくい人達を類別して十三を數へ、それからその後で「種々念佛往生の機」として念佛を申して往生する人達を大別して(一)智行兼備して念佛往生するもの(二)義解の上で念佛往生するもの(三)持戒念佛して往生するもの(四)破戒的ではあるが至心に念佛して往生するもの——破戒念佛往生の機(五)愚鈍念佛往生の人々の五類とし、更にその第一類、第二類に於て各々三種を數へ、第三類、第四類に於て各々二種を開き第五類に於ては十六種を舉げ、都合二十六種を列舉細別してゐる。その中間に恰も蝶番を打つたやうに、四障と言つて往生の障害となるものが四つ、四機と言つて往生の契機となるものが四つ特筆大書してある。この四障四機こそは『往生記』の核心骨目と

言つても然るべき程のもので、四障あるが故に難邃往生の機があり、四機あるが故に種々念佛往生の縁が産れる譯である。それから一番終りのところに「小消息」が載せられてある。これは改めて申すまでもなく法然上人の御作で、法然精神の骨髄として、一枚起請文と共に私ども浄土宗徒が朝夕拜誦するところのものである。斯ういふことを書いたものが『往生記』である。單に『往生記』ではその教義内容が一見明了でないから、古徳は「得不得」の三字を追加して『往生得不得記』として御相傳になつてゐることは心得て置く必要がある。

六 特に四障・四機を中心として 今この『往生記』の骨子と言つても然るべき四障・四機を项目的に擧げてみるに(一)疑心(二)懈怠(三)自力(四)高慢が四障で、(一)信心(二)精進(三)他力(四)卑下が四機である。つらくこの四障・四機なるものゝ思想内容を檢辨してみると、結局四障の逆が四機、四機の反對が四障で、恰も紙の両面表裏といつたやうな關係にある。それで今は講述の便宜上主として四障のことを述ぶるに止むるつもりである。

わが浄土宗の信仰の途上で一番障害となるものは何といつても(一)疑の心である。疑心暗鬼と言つて懐疑の心には暗鬼が連りに躍る。

「神や佛といふものは本當にあるのだらうか」「お念佛を申したら果して救はれるだらうか」かういつ

たやうな疑心暗鬼が胸裡に往來する。かゝる場合、私はいつも親鸞聖人の告白を想ひ起すのである。

親鸞はたゞ念佛を申して彌陀如來のおたすけに與あづかれよと御師匠さまに教へて頂いたのを、そのまゝまうけに信じてゐるばかりで、その他ほかに別にこれといつて仔細はないのである。念佛が實際淨土に生れる業たはであるか、それとも地獄に墮ちる業なのか親鸞にはわからない。たとひ法然上人にだまされて念佛申した爲めに地獄におちたところで少しも口惜しいことはない。といふのは念佛以外の修行は勵むでそれによつて佛になれる筈の自分が、念佛を申したゝめに地獄におちたといふならば、それこそ御師匠様にだまされて殘念などいふ後悔もあるであらうが、そんな修行も到底力及ばぬ自分であるから、どうせ地獄より他に住家のないものときまつてゐるのである。(歎異鈔―意譯眞宗聖典)

私は宗教の信仰といふものは、或る點に於てかういふ自己認識(信機)の窮地に追ひ詰められてから、人格の權威や傳統を信することに依つて確立するものではないかと思ふ。この背水の陣地から振ひ立つて絶りついた信仰は正に確乎不拔なものがある。何らの疑をもさしはさまない信受性、それは信心となり信念となつて増長する。眞の往生人たるためには何よりもまづ信心を體得することが肝要であることを銘記せねばならぬ。

それから吾々の極樂往生を妨ぐる障害として(二)懈怠と(三)自力と(四)高慢とが數へられてゐる。幸ひなことに『無量壽經』(卷下)に「憍慢と弊と懈怠とは、以て此の法を信じがたし」といふ聖句があるから、

こゝでは便宜上、懈怠と自力と高慢との三障をひつくるめて述べることとする。

まづ(二)懈怠といふことであるが、これは「時間がないので」、「氣が進まないのので」などいふ自己辨護の心である。實行には勇氣が必要である。修養といふことは畢竟よいと思ふことを實行し精進することである。人事を盡さずして徒らに天命を竝つは懦夫の事。人生は正に精進の一語に盡きるといつてよい。況して佛敎の最大特徴は覺醒生活の體現に存する。永遠の生命に向つて念佛道を勇進するところに念佛行者の生命がある。

よしあしの審判はとはじいつはりを

棄てゝまことの世にひたむきに

これは九條武子夫人の歌である。善と惡との對する相對の世界の囚はれから、善惡を超へたる、したがつて自他を超へたる彼岸、彌陀の御淨土へと、ひたむきに進まんとする第一義的要求の切實さが、鮮かに讀まれてゐて、洵に尊く、ひたすら清高の妙好人であつたことが偲ばれる。御參考までに善導大師の日中偈を御紹介しませう。

人生ける時精進ならざれば喩へば樹の根なきが如し。華を採つて日中に置かんに、能く幾時か鮮かなることを得ん。人命も亦た是くの如し。無常は須臾の間なり。諸の行道衆に勤む、勤修して乃ち眞に至り給へ。

と云ふのです。即ち念佛往生のためには努力精進の必要なることを御示し下されたもので、とりわけこの「勤修して」といふ言葉を味はつていただきたいのです。

次に(三)自力(根性)が往生の障りとして擧げられてゐる。近ごろ自力更生といふことが頻りに高調せられる。自力更生は教育の目的から云つても眞にふさはしいことで、受動的に他力によつて動かさるゝ機械のやうな人間を作り上げることが、餘りに人間の自由なる活動力や、創造性や、批判心の鍛錬などが頭から無視されてゐて、全然問題にならない。餘事は姑らく措き、凡そ人間の力には限度がある。誰もが全能全智であることは許されない。なるほど「知識は力なり」といふ言葉もある。けれども人間の知識萬能を以て、どんなに堅牢な文化的施設をやつたところで、激甚な天災・地異に對しては無防禦、無抵抗とならざるを得ない。現代人はあまりに人間の知識のみを過信する。しかしどんなに醫學が進歩しても人間が「時間」といふものに規定を受けてゐる限りは死なねばならぬ。病苦・人間苦にしても或る程度までは醫學的療法や財力で救はれるにしても、そのすべてを救ふことが出来ぬ。殊に心の中の煩惱、心垢の洗除に對しては知力も財力も權力も乃至道德も殆んど無力であると云つてよい。加之、この世には人力では到底解決されないこと、凡そ人間である限りは永遠に解決されない問題がある。私は嘗つて高野山で、一羽の雁を無造作に畫いて、その側に「汝をれいづくに往く」といふ賛をした一軸を見たことがある。

筆者は徳川時代に於ける佛敎界の一明星慈雲尊者である。單なる一箇の小軸だが暗示があり情音があり、文も人も共に生趣が横溢してゐる。抑々汝それいづくに往く。獨生、獨死、獨去、獨來、私たちの心を打つものはこの人生の現實の姿である。かゝる生命の孤獨に徹する時、人は「偉大なるもの」の前にひれ伏す。人力ではどうにもならぬと感ずる心は「偉大なるもの」の尋求である。かくして他力淨土の門が開かれる。

自力更生は勿論よいことである。しかし自力にも限度がある。自力にかぶれ過ぎては遂に傲慢な自己欺瞞に終つてしまふ。所謂自力根性のものには他力に感謝し、恩を感ずる氣持も薄く、恐らく又佛光を仰ぐ敬虔な心も容易に湧いて來ないであらう。わが宗に於て自力（根性）を以て往生の障とした理由は即ちこゝにある。

もう一つ、往生を裏切り易い障害は（四）高慢である。凡そ人間は殆んど例外なしに尊大性、誇大性を持つてゐる。その生るゝや泣くことによつて、やがて腕力によつて、更に長ずるや智識、經驗、技能によつて、權力、地位、財力によつて、ひたすら自己の大を現はさうとするのが常である。高慢だと他人に不快の感じを與へ、交際の圓滿を妨げ、生涯親友を得ないのみならず、尊い佛の道さへ聞かないといふ悪い始末になる。法の水は高い頭にはたまらない。高慢の頂には甘露の法雨は落つかない。従つて往生人たるために自己に誇る心、尊大ぶる心を放棄せねばならぬ。往生人に求められるものは實に謙下

(卑下)の心である。謙虛に耳を傾ける心、己を空しうして與へられるものを受けとる心、素直に合掌する心、「大いなるもの」の力にひれ伏す心である。

おろかなる心につくすまことをば

みそなはしてよ天つちの神

これは聖將東郷元帥の歌である。何ら神に求むるところなく、たゞその光に照らされて、自らを「おろかなる」と謙下し、大いなるものゝ力にひれ伏して、たゞ照覽あれと天地の神に敬白してゐられる。この謙下、この敬虔なる合掌、「未曾慢恣」の聖心こそ宗教感情の最も純粹なるものである。

「人のふり見て我がふりなほせ」といふ諺もある。孔子も「賢を見ては齊しからんと思ひ、不賢を見ては内に自ら省る」と言はれてゐる。忠臣愛國には大楠公はよき御手本である。忠魂義膽の權化、大楠公の事蹟については更めてこゝに繰返すまでもない。鎌倉幕府の勢威に壓せられて、何人も勤皇のことをいふものなき節義没却の混沌時代にあたり、獨り眇々の身を以て、率先大義を高唱し、四方義士の氣を鼓舞し、七生報國の至誠を一貫し、自らは斃れて後なほ遺訓を垂れ、一門を擧げて國難に殉せられたのである。その公が大義高節や巍然として山河と共に並び存し、萬古のもと、人をして天朝の赤子、日本國民としての本分にめざめしめずんば止まないものがある。人のふりは見易いから、その善い點を見て自己の鑑とすることは實によいことである。而して此事たるや、學ばんとする心だにあらば決して難事で

はない。若し我等が皆な、四障四機の教を以て心とせば、我等はその往生人としての機能を完全に發揮するに於て、遺憾なきに幾きものがあらう。希くは我等同行人をして四障四機の精神を體得せしめよ。

七 わが宗の正機

ところが、機根は千差萬別で、往生人にも種々ある。既に一言したやうに、(一) 所謂智行兼備で廣く經法を聞いて佛敎の義趣を領解し、而かも念佛して往生するものがあり、或は又(二) 善導・法然兩祖を初め淨土念佛門の先德等の述作を通して彌陀本願の義趣を信知した上で、念佛して往生するものがあり、或は(三) 勇猛強盛に持戒念佛して往生するものがあり、或は又(四) 持戒持律は到底わが分齊ではないが、せめて如來本願のお念佛を申して往生の大利に預からうとするものもある。この四類も細別すれば十を以て數へねばならぬが、わが宗の立場からはこれ等の機類は皆な傍機で、念佛往生の正機でないから、今はこれを省略することにしたと思ふ。但しこの四類の中、最後の第四類は所謂破戒念佛第二の機と傳へるところのもので、破戒犯戒のことが心に懸つて堪らぬところから至心不斷に念佛する人、或は持戒持律はとて我が分齊ではない、かゝる破戒の罪人なればこそ阿彌陀如來の御本願、御攝化がある譯だと一心に佛に打ち絶る人たちは即ちこの機に屬する。この機類の人たちには廢惡修善の意志もあり且つ偏に彌陀の願力を憑む點に於て單直仰信、大信に近いものがある。

それで、わが宗ではこの機を以て近、大信と云ひ、大信の機——愚鈍念佛第一の機に次ぐもの、わが宗の正機の次位に來るものとして「破戒念佛第二の機」と稱することは、初重相傳の上では忘れてはなら

ない點である。

かく念佛往生の機は種々あるが、わが宗では(五)愚鈍念佛往生の機を正機とする。この一類の中にも亦十六の機類を數へることが出来るが、その劈頭第一に來るものに左の如きものがある。

善知識の教を聞いて一向に信を生じ、威儀法則を辨せず、行往坐臥を論せず、日夜に念佛して、久しくその功を積んで往生する人。

これが所謂愚鈍念佛第一の機で、單直仰信の機、宗門第一の正機と云はるゝものである。従つて初重相傳の要諦も亦この機を領解せしむるにあると云つて然るべき程であるから、今は特にこの愚鈍念佛第一の機に就て述ぶることにしよう。

ところで、齊しく愚鈍と云つても、其内容上よりすれば(1)生愚(2)還愚(3)同愚の三愚になる。(1)生愚とは所謂愚鈍念佛、生れつき愚鈍なものである。次に(2)還愚とは愚痴に還るといふことである。自分より愚かなもの、見ゆる間は本當の智者ではない。眞の智慧者は愚に徹し、愚に目ざめ、愚に還り、大愚に生きる。私は還愚のことを考へる時、いつも私共の精神生活上の相對々立を思ふ。即ち私共は眞といふことを考へる時必ず僞を思ひ、善は惡と共に會得され、美は必ず醜の對立として感知される。智慧眼が開發されてくれば來る程、大愚の認識が深化する。私共の道德的思想が高めらるゝに従つて、惡も亦深められる。又美に對する私共の感知が精練されゝばされる程、私共は醜に對しても亦敏感に成つて來る

のである。かうした私共の精神生活上の相對々立を實際的の二元と名づける。而してかうした實際的の二元が實に入信の機縁、淨土歸入の契機となるべきものと私は思ふ。高祖善導大師は夙に大悲大智の前にひれ伏した自己反省の心境を次の言葉で表現されてゐる。

決定して信ず。自身は現に是れ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に没し常に流轉して出離の緣あることなし。

即ち過去も無窮、未來も無盡、たゞ罪惡生死の連續、浮きあがることなき常没流轉の凡夫と自覺したところ、これ實に善導大師の自己反省の姿である。何といふ底の知れぬ深さと透きとほるやうな明徹さとをあはせ具へた宗教的認識であらう。深智慧の權化、法然上人のことについては更めてこゝに繰返すまでもない。學八宗を該ねて愚痴に覺め、徳一世に高くして十惡に戰き、自ら「愚痴の法然房」「十惡の法然房」と名乗りを上げて、たゞひたすらに無觀稱名の大道を躍進せられた御姿を追慕し奉る時、愚痴に還つた敬虔そのもの、徳光、そしてその還愚が直ちに專修念佛の大行となつてゐるところに還愚の光芒昭々たるものがある。親鸞聖人にしても亦愚禿親鸞と自稱されてゐる。かく、昔の聖者は常に自分の名に、愚痴、愚禿、大愚などの謙下な名をつけて、心は高く深く生き抜いたのである。

近時、わが躍進日本に於ける教育の進展は實に目ざましきものがある。しかし、智育偏重の非難を隨所に聞く。何事も偏するのは悪い。殊に教育にあつては、人間の完成を目的としてゐるだけに、一方に

偏すべきでない。文字通りに智に偏するはよくない。今の世は餘りに物知りが多く、餘りに愚者、罪人の少くない、否その自覺のないのに驚かされる。智に硬化して安心立命を得ず、智に墮して深い信念や厚い情意を缺き、ためにその行動が全く右顧左眄、無軌道的である場合が多い。私共は智に偏せず、智に墮せず、寧ろ智に徹せねばならぬ。智に徹すれば却つて理論のための理論を避けて信仰の世界に躍進する。餘事は姑らく措き、宗祖法然上人の本身は佛陀のそれと同じく恰かも良醫が病の原因を知りて、その良法を講ずるが如く、衆生の惑病を治する所にある。瀕死の重病人にはその藥の製法、その功能を研究し吟味する餘裕がない。醫師、藥劑士を信じてたゞ飲むだけが關の山である。しかもお念佛の場合はその醫師、藥劑士の重責に任じてゐる方が大悲大智の願王阿彌陀如來である。その如來の匙加減になるお念佛、深智慧の化身法然上人の選擇になるお念佛である限り、その製法、その功能の検討は毛頭必要はない。申せば助かる、何にも知らぬでもよい。こゝにわが宗の獨自の徹底せる如來大悲の見方が存する。この單直仰信に生き抜くところが即ち還愚である。

尙、今一つ同愚といふのがある。これは愚鈍の身、無智の輩に應同するの意である。

念佛を信せん人は、たとひ一代の法をよくく學すとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智の輩に同うして、智者の振舞をせずして、唯一向に念佛すべし。

とは、法然上人が末代の衆生に對して自ら遺誠し給ふた所である。こゝが初重の眼目であり、骨髓であ

る。とりわけこの「智者の振舞をせずして」といふ言葉を味はつて貰ひたい。「智者の振舞をせずして、唯一向に念佛すべし。」この點をよく深思して貰ひたい。たゞこれだけである。私は此上、別段蛇足を添ふる必要はあるまいと思ふ。

法と機と合ふか合はぬを調べての

後に行ふ道を定めよ

これは機と法、病と薬の合不合並にその實踐的効果の問題をも含めて詠んだ古歌である。所謂疾前無薬、機前無行で、疾病以前に薬はない。常没流轉の凡夫がなければ彌陀の本願もない。念佛本願はたゞ私共のためである。否、念佛往生の御本願はたゞ私一個のためであると押し戴いて信行具足の人となつて貰ひたい。

これで初重の講説を終りたいと思ふが、希くはいよ／＼自己の機根に目ざめ、還思、同患の意義を明徹にし、以て單直仰信の念佛行者たるの覺悟を新たにされんことを、返す／＼も念願する。

【餘説】 往生記について

本書には本來題名がない。蓋し本書は淨土往生が出来る機類と出来得ないそれとを分別解説することを骨子とする關係上、後世その内容上より「往生得不得記」と云ひ、又正釋第一の科段によつて「難遂往生機」と云ひ、或は略して「往生記」と名づけたものである。殊に「往

生得不得記」の題名は全く書中の内容に相應してゐる。以上は宗學の常識で、取り立てゝ云ふ程のことでもない。

閑話休題、何人も少しく宗學に知識あるものは、本書の撰者に對する眞偽問題のあることを知らぬものもあるまい。然し、この事たるや吾々宗徒の一大關心事でなければならぬ。

望西樓了慧上人は淨宗第三祖記主門下の俊英、博學達識、殊にその深重なる報恩の願行は幾編の述作に躍動してゐる。その雄篇『漢語燈錄』の跋文に「往生機品一卷稱『黒谷ノ作者即偽書也』と記してゐる。こゝに謂ゆる往生機品なるものが果して往生記なるか、或は別書なるかは尙疑ひの餘地があるにしても、了慧上人の撰になる『漢語燈錄』には今の「往生記」を收めてゐない。本書の撰述問題は實にこゝにその端を發する。

又四休庵貞極上人は徳川中期に於ける淨宗の一明星、識量宏遠、行化不退、一代の述作八十餘部百五十餘卷、特に傳法に關する論議の如きは、啓蒙撥塵洵に傾聽すべきものがある。しかも、その往生記を論ずるや、「此書祖師の眞撰に非ず、或は高野の明遍、或は鎌倉の觀譽の述作なり」といふ義山上人の説を支持し、又自らは別個の理由を掲げて其の偽書なる所以を論述してゐる。(五重廢立鈔・貞極上人全集上)

尙、この往生記を以て法然上人の眞撰と見ず、而かも積極的に本宗五重相傳の初重には須らく法然上

人の眞撰たる『選擇集』を以て之れに代ふべしとするものに明治時代の傑僧福田行誠上人がある。即ち誠公は之れに關して、次の如くに述べてゐる。

昔日、往生得不得の記文を以て初重とす。而して此の書未だ作者をつまびらかにせず。古寫本源空上人作と記す。決して上人の語氣にあらず。四休庵の曰く良遍僧都なるべしと。誠、案す、すこぶる往生決心記の語氣に似たり。然れども必ず良遍にあらざるべし。投機鈔撰者の評なし。意あるに似たり。故に今古傳に復して選擇を以てす。(傳語・行誠上人全集)

と、勿論かくの如きは、吾人の見を以てするに到底正當の批判ではないけれども、ともかく之を表面からすれば右の如く解し得らるべき餘地のあることも亦否定し得べからざる事實である。ともかく、この往生記の撰者問題は傳法史上に於ける昔からの暗礁であつたのである。

けれども、吾人は傳法近世史を回顧する毎に、大正十年の晩秋、大悲願王の慈迎に接したわが恩師勤息義城上人を想ふ。福田行誠上人の爆彈投下の後には必ず傳統擁護、嚴護法城の法將が出現して、身をもつて傳法の大義を高唱せらるべき可きことは誰しも豫期してゐた。果然それが明治二十三年八月『傳法金輪論』一卷となつて現はれ來つた。その一節に云ふ。

我が宗ノ初重ノ卷物タル者ハ決シテ僞書ニ非ズ。所以者何トナレバ初重ノ卷物ノ初メニハ難遂往生機源空撰ト書シ、投機抄ノ終リニハ空師七代ノ弟子了譽記之在判、傳心抄ノ終リニハ辨師六代ノ弟子了

譽記ト、徹心抄ノ終リニハ然師五代ノ弟子了譽記レ之已上。若シ此ノ書空師ノ作ニ非ズンバ何ゾ空師七代或ハ六代或ハ五代弟子了譽記レ之等ト述セン。加之ナラス貞傳集・口傳抄・總五重記・無題記及ヒ其ノ餘何レノ切紙ノ中ニモ元祖ノ作ト稱シテ宗書ノ中異論有ルコト無シ。然ルヲ誠公何ニ意有ツテカ、此レ等ノ祖師相承ノ傳籍ヲ除棄シ而シテ名越ノ門派タル義山師及ヒ隱士貞極等ノ弊々タル末師ノ異義ヲ信用シ、六百年間列祖相承ノ古法ヲ廢シ、自ラ新法ノ傳語ヲ述作シ、從來初重ノ卷物ヲ廢シテ選擇ヲ以テ古傳ニ復スルトハ是レ何ノ妄說ナルゾヤ。是ノ如キ列祖ヲ輕蔑スルノ言語耳ニ聞クニ凌ヒズ。況ヤ白箴正流ノ安心ヲ傳受スル者ニ於テハ誰レ人カ之レヲ信用スルノ道理有ンヤ。古傳ニ云ク、名越ノ門下ニハ元來派祖往生記相承ナキガ故ニ選擇ヲ以テ初重ノ卷物トスト云ヘリ。若シ爾ラバ誠公白箴正流ノ傳法ヲ不正ナリト認定シ、名越尊觀ノ末派ニ歸入令シムルノ意氣ナラン。苟クモ指ヲ白箴正流ニ染ル輩ヲ誰レ人カ之レヲ許サン。伏テ請フ、天下同胞ノ學士、相承ノ傳籍ヲ熟覽シテ朱紫混同スルコト勿レ。

深重なる報恩の願行、祖德顯揚の赤誠、傳法明徹の志願、凝つて文を成し、正に誠公に肉薄するの概がなる。その護法的精神、その殉教的熱情は實に感激に禁へないものがある。若し世に具眼者あらば、その死後と云はず、生前に於て、宗門は當然感謝の情を、勤息上人に向つて表すべきであつた。

筆者は本書に就て尙ほ語る可き多くのものを持つてゐる。されどそれは姑らく讀者諸彦の自得に一任したいと思ふ。